

■ミクロ経済学■ 4：市場と予想そして均衡

* 教科書 浦井・ (2012) 第1章 基礎的概念 p.58 ~ p.60

他分野からしばしば批判的に取り上げられることも多い経済学的な個人の取り扱いの中でも、極めて限定的かつ決定的なものであり、また重要とも言うべきであるのが「予想」に代表される対する扱い、つまりは「よく分からない」ことに対する態度、そしてより深く言えば「合理性とは何か」という問題の取り扱いである。⁸ これまで商品について述べてきたことから、時間（そして貨幣ならびに市場構造）が、我々の議論において非常に重要な意味を持つことは想像に難くない。我々の取り扱う問題が時間概念とともに未来に向けて関わる時、我々は未来における現時点では「よく分からない」ことについて、何らかの「予想」をもって、その下での合理的な（社会科学的な）原因・結果という枠組（客観的認識）に話を持っていくことになる。⁹

【1】 予想と経済学理論：市場行動

ある時点における市場とは、そもそも可能性としてありとあらゆる取引を許容する商品空間上、現時点において可能な商品のやりとりがどのようなものを限定したもの（部分空間）であった。そのような可能なやりとりが、「交換比率（価格）」を所与とした主体（価格受容者 **Price Taker** の仮定）のみからなるとき、経済は完全競争的と言われる。¹⁰ 各主体は自分の消費、もしくは生産の計画期間が、その市場で取引される商品の範囲を超えて将来にまたがる場合、その行為を合理的なものとして記述するにあたっては、将来の市場への「予想」をもって、現在市場の需要と供給を決定すると考えることが自然である。（★先週の話：金融市場が完備であるとき、その価格予想が全て当たるなら、現時点で全ての消費、生産計画を立て、それを実現することができる。）

【2】 予想と経済学理論：均衡

上記設定に加えて、今日の経済学理論の極めて重要な特徴として経済を「ある安定した状態＝均衡」と見る（均衡理論）ということが挙げられる。市場での交換比率が、その市場の全商品に対する全主体の需要と供給を同時にバランスさせる水準（一般均衡価格）に決まると考えるのが、「一般均衡理論」である。¹¹ 全ての主体の行為（消費・生産もしくはそれを可能にする交換行為）について、その全計画期間が一つの市場でカバーされている簡単なケース（静学的一般均衡理論）から、そうでないより一般的なケース（動学的一般均衡理論）に向け、一般均衡理論は以下のように分類できる。

- (a) 交換の一般均衡：静学的 消費主体のみ 生産主体無し
- (b) 生産の一般均衡：静学的 生産主体あり
- (c) 資本の一般均衡：動学的 実物資産・来期に続く企業の記述（資本蓄積）あり
- (d) 貨幣的一般均衡：動学的 貨幣・名目資産を含めて全てあり

⁸ 「限定的」と述べて「重要」といった表現を用いるが、こうした表現が経済学理論の限定性のみならず、むしろ学問的知識を形成していく上での必然的態度として、積極的意味合いも込めて用いられていることは、本講義を通じて強調したい事柄である。実際、いかに単純な想定であっても、「もしもそれだけ単純な想定をする人々ばかりからなる世界であれば、どのようなことが起こるだろうか」ということについての厳密なる（先にも述べた Weber の意味での「客観的」）知見として、我々はそこから多く有意義なものを引き出すことができる。たとえばアマルティア・センはその著作『経済学と倫理』Sen (1987) において、飢餓・貧困といった問題が単純な想定下で生じる一般均衡的な状況として、厳密に示されることの意義を強調する。）

⁹ 合理性の枠組みに入れることそれ自体の是非については、もう何度も指摘した（p.7 および p.11 の脚注）ので、繰り返さない。

¹⁰ 贈与を、何かを見返りとした交換として、表現する可能性もあろう。しかし贈与とは本来相手の無名性ではなく、誰に贈与したかとともに成り立つところが本質である。その意味で、それはもっと特別な非対称情報構造をとまって、記述すべきであろう。

¹¹ Walras (1874) にはじまるこの理論は、今日経済学理論の骨格をなす考え方であるが、「主体の計画期間」と「市場構造」の取り扱い次第では、今日なお未完成というべきものである。ワルラスの一般均衡理論は同時代であるソシユール言語学にも影響を与えたと言われる (Piaget 1970)。

上記分類はワルラスによるものであるが、今日においても、完成していると言い切れるのは「静学的」部分にすぎない。(1950~60年代: 数学における Brouwer・角谷などの不動点定理の応用により、数学的モデルの「整合性」と言うべき「(一般均衡) 解の存在」が証明された。)

【2】 予想と経済学理論: 予想と動学的均衡理論

「動学的」一般均衡(ある主体の行為の計画期間は市場の範囲を超えている)の場合の取り扱いには、今日大きく分けて2通りのものがある。

(1) 一時的一般均衡という考え方: Hicks (1939; 9章・10章)・森嶋・Grandmont

各主体が(これまでの価格などを前提にしながら)来期以降の価格についてそれぞれ異なり得る(必ずしも当たらない)予想を持つ。その下で、とりあえず今期の市場に相当する部分のみについて取り引き(需給)の均衡に注目する。

(2) 合理的期待均衡(特殊ケースとして完全予見)という考え方:

各主体が来期以降の価格について(その当該モデルに基づいた合理的分析をもって)同一の予想を形成(合理的期待形成)する。(そしてそれが当たる—完全予見)

● 合理的期待形成: 経済学の世界観(一つのモデルが捉えているもの)はあくまで真実の世界の一部分を把握したものであるにすぎないが、それが「一部分であるにすぎない」ということに我々が議論の重点を置かない(例えそれが真実で無くとも、我々の「思い込み」であって構わない)とすれば、合理的期待形成(あるいはその一形式としての完全予見)という考え方が出てくる。実際、我々が一つの経済学的世界観(モデル)を支持するのは、そのモデルが我々の「知り得る限り真の世界を良く叙述しているから」であり、それは「例え誤ってしようとも、その誤っていることを我々が知り得ない(知ろうとしない)」ことと見分けられないとする考え方も(合理性を我々の知性の最上位に置くならば)あり得る。だとすれば、我々が「とある世界観を持っている」ということを前提とする合理的議論は、全てその合理性の根拠というべきものを、そのモデルにおける均衡(世界の在り方についての結論)と現実の世界の在り方の間に乖離が無いこと(その乖離を我々が知ろうとしない—重点を置かない—こと)に帰着させなければならない。これが合理的期待形成の「合理的」が持つ意味であり、更にそれが「思い込み」であるということを見捨てた理想状況としての「完全予見」という考え方が出てくる。こういった20世紀的知見を、必ずしも無駄にせず、それらと和解するためには、21世紀、おそらく我々が「合理的」という言葉を、人間にとって、もっと低いもの(たかが合理性)として、位置づける必要がある。少なくとも合理性というものを(場合によってはカント・ヘーゲルの伝統から外れてでも)「真の知性」あるいは「真の悟性」の支配下に、置く必要がある。

※ 予想と貨幣: 世代重複モデルと貨幣的均衡 — 各期1財、2期重複の Young Old モデルの予算制約式。

REFERENCES

- Hicks, J. (1939): *Value and Capital*. Clarendon Press, Oxford. 日本語訳: J. R. ヒックス『価値と資本』岩波文庫, Tokyo.
- Piaget, J. (1970): *Le Structuralisme*. Presses Universitaires de France. 日本語訳:「構造主義」(ジャン・ピアジェ著. 滝沢武久, 佐々木明共訳) 1970, 文庫クセジュ, 白水社, Tokyo.
- Sen, A. (1987): *On Ethics and Economics*. Blackwell Publishers, Oxford.
- 浦井 憲・吉町昭彦 (2012): 『ミクロ経済学 — 静学的一般均衡理論からの出発』ミネルヴァ書房, Kyoto.
- Walras, L. (1874): *Éléments d'économie politique pure*. Corbaz, Lausanne. English translation: *Elements of Pure Economics*, London, George Allen and Unwin 1926. 日本語訳: 久武雅夫, 1954.